市長賞

ゼロ

白井　希

1

大きく息を吸い込んで、ちょっと止めて、静かに鼻から出す。それを2回。

ため息がばれないようにしないと。

今回こそは勝つと一生懸命取り組んだのに。

廊下の掲示板には、A4サイズの紙がずらずらと貼り出されている。「中間テスト総合成績」というタイトルの紙に、横書きで「城崎朝香（しろさきあさか）」、つまり私の名前が載っている。そしてその左側には「2」の数字がある。

私の中学では、中間、期末テストや月末の小テストの結果が毎回、廊下に貼り出される。このご時世、個人情報保護だとか、個性の尊重だとかいろいろ言われそうだけど、これはこれでゲームみたいで結構面白い、と私は思っている。そうなんだけど。

なんでずっと2位を抜け出せないんだろう。

「すごーい。やっぱ朝香ちょー頭いいじゃん」

突然耳元で大声を出されてびくっとする。いつものかん高くて少しかすれた声。那由多（なゆた）だ。
「えーなんなのその顔。めっちゃ眉間にしわ寄ってるよ」
那由多は笑う。
「もしかして2位が悔しいの？　出木杉君かよ」
大きな口元から覗く那由多の歯並びがきれいだ。赤い縁の眼鏡とよく似合う。でも、眼鏡がなくて、くしゃくしゃの短髪じゃなくて、がつがつ歩かなくて、大声でしゃべらなければ、もとがカワイイんだからもっとずっとモテそうなのに。
「ちょー羨ましいけどね。もっといい顔しなよ。美人が台無しですよお嬢さん、もったいない」
那由多に言われたくはない。
「見てよこれ、私なんかこんなんだからね。名乗ることも許されない感じ？」
那由多が指さしたのは39位のところだ。名前が伏せられて、「＊＊＊＊＊」となっている。20位以下は全部こんな表記になっている。一定の配慮なんだろう。
「那由多だってちゃんと勉強すればいいのに」
「あー無理無理。私ゲームと読書で忙しいから」
那由多はゲームとラノベが大好きだ。
「ま、とりあえずはおめでとう。あ、もうそろそろ戻らないと」
そうだね、と言って那由多と教室に戻ることにした。その前にもう一度張り紙を見返す。私の名前の上には、「1　寺星（てらぼし）　零（れい）」と書かれていた。同じサイズの活字なのに、なぜかひときわ大きく、輝いているように見えた。

2

教室に戻ると、次の授業までまだ少し時間があった。みんな慌てる様子もなく友達と楽しそうにしゃべっている。

そんな中、一人だけ頬杖をついて、窓の外をぼうっと見ている男子がいる。寺星零だ。

髪は少し長めだが、いつもきちんと切りそろえられている。少し細身な色白で、他の男子と違って（それと那由多と違って）がさつさがない。なにせ何もしゃべらないんだから。

寺星零はみんなから「ゼロ」と呼ばれていた。「零」という名前だから、というだけじゃない。全く人と関わろうとせず、話しかけても返事をしないから、ゼロだ。

もちろん、本人に「おい、ゼロ」と呼びかける人はいない。いじめられているという感じでもない。特に関わりもないので、気にかけることもない。存在感もゼロだ。

と、ふとゼロと目が合った。ゼロは一瞬何か言いたそうな顔をしたが、すぐにまた外に視線を移した。

どんな勉強をしているのかとても気になるけれど、近づきがたい雰囲気があって、話しかけたこともない。1年の時からそうだった。私は一生懸命勉強して、少しずつ順位を上げてきたけれど、ゼロは最初からダントツの1位だった。そして私は一度も勝ったことがない。

悔しい。普段からどういう生活を送ってるんだろう。

「また1位だったね。すごいね」

思い切って声をかけてみた。

声を掛けられたことによほど驚いたのか、一瞬顔を赤らめた気がした。ゼロでもそんな表情するんだ。でもそれは一瞬で消えた。

「別に」

また外を向いてしまった。声をかけたのに、そっぽを向かれてしまって、どうしたらいいのかわからない。

「朝香！」
見かねた那由多が声をかける。
「やめなよ、ゼロだよ。無駄だよ」
那由多が大きな声で囁く。これでゼロに聞こえていないつもりなんだろうか。
「別にだって。別に。はあ？　中二病かよ。まあ確かに中二だけど。どうせろくな返事しやしないんだからさ」
授業開始のチャイムが鳴った。ゼロはずっと振り向かなかった。

3

「もう。ちょっと待ってよ」
思わず那由多に声をかける。学校の帰り道。道路はまっすぐ、緩やかだけど延々と上り坂になっている。ペダルが重い。
「運動不足かねお嬢さん。勉強ばかりしていないで、少しは体を鍛えたまえ」
いったいどこにそんな体力があるんだろうか。ゲームと読書しかしていないのに、那由多はすいすいと自転車を漕いでいる。
「なんでそんなに急いでるの？」
「私、早く家に帰って『サイレントシティ』やらないとだからね」
「なにそれ」
「知らないの？　ゾンビをマシンガンで撃ちまくるやつ。ちょーグロいの。おえってなるやつらを全部まとめてやっつけるとめっちゃ気分がいい」
「へえ」
「まあ朝香は興味ないか。でもどう？　今度一緒に」

「……そのうちね」
夕方だというのに暑さがおさまる気配もない。汗ばむ背中が気持ち悪い。
セミが鳴き始めている。心なしかまだ鳴き方が弱い気がする。そんなにしんどいようなら鳴かなければいいのに。
坂道がずっと続いているような感じがした。私はいつまでこうやって坂道を上り続けていくんだろうか。

4

今日も朝から暑い。7月も半ばだ。確かに暦の上では夏だけど、これからさらに暑くなるのかと思うと気が滅入る。あーあ、早く一日が終わらないかな、と朝からグズグズと考えているうちに、朝の会が始まった。
「えー、今日は皆さんに一つお知らせがあります」
担任の山本先生が改まった感じで告げた。最近少し薄くなりはじめた前髪を何度もかき上げる。
「非常に急な話、というか、実は前から話があったんですが、本人の強い希望で、これまでみんなに言わなかったことがあります」
いつもと少し違う感じがした。何だろうか。
「えー、突然ではありますが、本日をもって、寺星君が転校することになりました」
教室は水を打ったように静かになっている。それはそうかもしれない。えーさみしい、と言うほどゼロと親しい人間はここにはいない。どう反応したらいいかわからない。
「じゃあ寺星君、皆さんに挨拶を」
山本先生に促されて、ゼロは教室の前に出てきた。
「今までありがとうございました」
小さな声でそれだけ言うと、軽く頭を下げて、さっさと席に戻ってしまった。

え、それだけ？　と言いたげな山本先生は、教室にぽっかりと開いた穴を埋めるようにして話をつづけた。
「寺星君は、非常に残念ではあるのですが、遠くへ行ってしまいます。ご家庭の都合で、カナダに行くそうです」
カナダ、と聞いて教室がざわつく。
「本当は今学期の終業式まで一緒にいるはずだったんですが、色々手続きの都合があって、急遽日程が早まりました。皆さん、寺星君との残された時間を大切にしましょう」

5

結局その日一日、ゼロに話しかける人はいなかったみたいだ。街ですれ違う通行人に、いちいち別れの挨拶をする人なんていないのと同じようなものなのかもしれない。
ただひたすら勉強だけして、友達と話もしなくて、いったい何が楽しいんだろう。
私は……私はどうなんだろうか。ゼロとどう違うんだろう。
「ごめん。先帰るわ」
那由多が慌てて荷物をまとめはじめた。
「え、どうしたの急に？」
「思いついちゃったんだよ、攻略法。これで絶対いける、いけるよ。ごめんね」
きっとサイレントなんとかの話だ。鞄にあれこれぽいぽい投げ込んでいる。
「あ、それから、もう夏だしその長い髪ちょっと切ったほうがいいかもよ。んじゃね」
那由多は足早に出ていった。
那由多がいなくなると、急に時間の流れがゆっくりと、重くなった気がした。
静かにため息をついた。ついさっき出ていったばかりなのに、那由多に会いたくなった。

一人で自転車置き場に行くと、ゼロが立っていた。衣替えはとっくに終わったはずなのに、何かの挨拶のためなのか、詰襟の制服を着ている。見ているこっちが暑くなりそうだけど、当の本人は平然としているように見えた。誰かを待っているみたいだ。

ゼロの目の前を通り過ぎようとしたとき、

「城崎さん」

と声を掛けられた。あまりに不自然な感じがして、その声の主がゼロだと気づくのに少し時間がかかってしまった。

「あの、これさ」

ゼロは白い封筒のようなものを差し出した。

「よかったら、家に帰って、読んどいて、ください」

よく見るとゼロの顔は真っ赤で汗だくだった。

「卒業アルバムの写真撮影で、季節外れの制服、着なきゃいけなくて」

こちらが何も訊いていないのに言い訳じみたことを言っている。脱げばいいのに。

「いつも橋本さんと一緒だったからなかなか渡せなくて」

橋本さん。ああ、那由多のことか。いつも名前で呼んでいたからとっさに思い浮かばなかった。

封筒のようなものを受け取ると、声にならないような、じゃ、という声を残して、ゼロは足早に去っていった。

手紙、なのか。この時代に手紙？　とも思ったけれど、そういえば電話、メール、住所といったゼロとの連絡手段を全く知らなかったことに気づいた。

6

拝啓　城崎朝香　様

拝啓とは書いてみたけれど、こういうとき、本当はなんて書いたらいいのか正直言ってよくわからないです。こうやって、手紙を書いたのは、城崎さんにお礼を言いたかったからです。ありがとう。

怒りや悲しみが止まらなくて、それを忘れるためだけに勉強をしてきました。そのうち何も感じなくなりました。

痺れているような無感覚に浸って生活している中、城崎さんがどんどん順位を上げてくるのを見ました。それまで何の感慨もなく生きていた自分が、焦りを感じました。その感覚は久しぶりでした。どうしても負けられない、と思って勉強しているうちに、自分の心が少しずつ解凍されていくのがわかりました。

なんというか、うまく言えないけど、ありがとうございます。

将来は、ＡＩ技術を使った医療の発展に従事したいと思っています。

また、連絡が取れたらいいなと思います。

寺星　零

7

正直言って何が言いたいのかよくわからない。

ただ、私が少しゼロの気持ちを動かしたということなんだろうか。

手紙にはメールアドレスが書かれていた。いきなりメールアドレスを渡されても何を書いたらいいのかもわからない。

「ね、知ってる？」

次の日の休み時間に那由多が言った。

「ゼロのこと」
一瞬ドキッとした。手紙を受け取ったことを知られたのかと思った。
「長谷川が言ってたんだけど」
長谷川君は那由多の幼馴染だ。
「ゼロって昔からあんなんじゃなかったらしいよ」
違う話題のようで少しほっとした。那由多がいつになく真剣な顔をしている。
「小学校のころお父さんが亡くなったんだって。それもゼロの目の前で。車道に飛び出したどっかの子を助けようとして、自分が身代わりになったらしいよ」
お父さんが亡くなった、という話は初めて聞いた。昔、何かあったらしいという噂はあったけれど、具体的なことは知らなかった。
「それから、突然泣き出したり、『よその子を助けて自分が死ぬなんて馬鹿だ』とか授業中に急に叫んだり、かなり不安定だったみたいなんだけど、しばらくして誰とも話をしなくなったんだって。でもさあ、事情が事情なだけにみんなどう接したらいいかわからなくて、いつの間にかあんなんになったらしいよ。そこから勉強しまくってたらしい。まあ何て言うの、朝香も私も別の小学校だったからそういうの知らなかったけどね。もういなくなっちゃったし、いいんじゃないかって長谷川のクラスメイトが教えてくれたんだって。私も又聞きだからよくわかんないけど」
父親が目の前で亡くなるなんて、そんな小説みたいなことがあるんだろうか。まるで想像ができなかった。
昔、お母さんが強い腹痛を訴えて、夜中に救急車を呼んだことがあった。救急車のサイレンの音は住宅街では不釣り合いなくらい大きかった。何事かと出てきた近所の人たちの顔が、赤いランプに照らされていて、別の世界の住人みたいだった。結局、お母さんの腹痛は大したことなく済んだけれど、とても不安だった。
ゼロはそんなものとは比べものにならないような現実を目の当たりにしたんだろう。色々考えてもやっぱり

想像できなかった。ただ、すごく苦しかったんだな、ということを思うしかなかった。
こんな私でも、ゼロの痛みを少しは和らげることができたんだろうか。
「おーい。朝香。聞いてる？」
「ん？　うん。大変だったんだね」
「ね」
私達はゼロの机を見た。すっかり片づけられている。ゼロはもうこの教室には来ない。

8

終業式が終わって、昼には学校が終わった。夏休みだ。
帰り道、私はペダルを力強く踏み込む。
「ちょっと何、早くない？」
那由多が私を追いかける。
「運動不足かねお嬢さん。ゲームばかりしていないで、少しは体を鍛えたまえ」
「マジむかつく」
まっすぐな坂道は続いている。
ゼロにはもう会えないんだろうか。よくわからないけれど、また会えるような気がした。
私はそれまでに、何ができるだろうか。
入道雲が大きく育っている。空の青がまぶしい。木々の緑が深い。
蝉が勢いよく鳴いている。ペダルをさらに踏み込む。私は加速する。

夏が、来た。